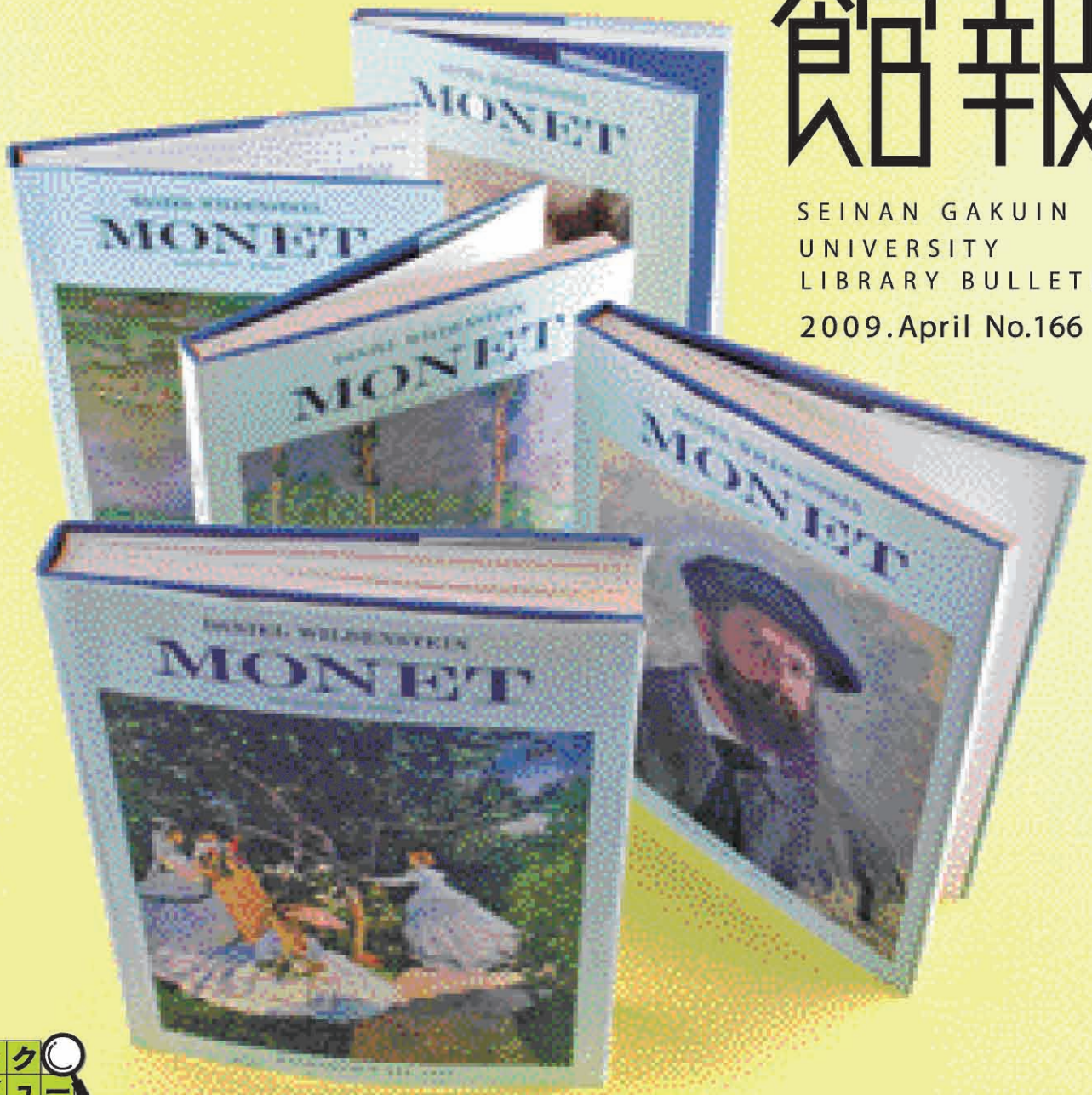
ISSN 1344-5642

図書館報

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

2009.April No.166



ブックレビュー

新入生にイチ押しの1冊

1 **美術家と本(4)**
デュシャンとセラヴィー あるいは「箱になった本」 図書館長 後藤 新治

2 **ブックレビュー** 新入生にイチ押しの1冊
『新約聖書を知っていますか』 宗教部長 磯 望
『小説 上杉鷹山』 学生部長 小川 雄平
『ハーバードVS東大 アメリカ奨学生のみた大学教育』 教務部長 松永 裕二
『日々の非常口』 言語教育センター長 久屋 孝夫
『ウェブ進化論』 情報処理センター所長 史 一華
『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』 国際センター所長 ドゥエン オルソン

3-4 **世界の図書館 タイ編**
シーソーダー寺院付属学校図書室 国際文化学部 国際文化学科 教授 片山 隆裕
タマサート大学中央図書館 経済学部 国際経済学科 教授 東 茂樹
チュラロンコン大学中央図書館 法学部 法律学科 准教授 平井 佐和子

5-6 **使ってみようシリーズ(10)**
新聞記事を探す 図書情報課 相田 芙美子

7 **蔵書ギャラリー no.7**
『ダニエル・ウィルデンシュタイン「モネ」全5巻』 文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 武末 祐子

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

美術家と本

4

デュシャンとセラヴィー　あるいは「箱になった本」

図書館長　後藤 新治

「されど、死ぬのはいつも他人である。」こんなキザな文句を自分の墓石にキザませた美術家、それが今日ご紹介するフランス生まれでアメリカに帰化したマルセル・デュシャン（1887-1968）[写真1]です。彼の最初の本格的な本、通称『グリーン・ボックス』（1934）[写真3&4]を出版したのがローズ・セラヴィー[写真2]。タダならぬ雰囲気をタダよわせる「彼女」の表情には、女装したデュシャンの遊び心が見え隠れしています。今なら戦略的トランスジェンダーあるいは偽装的トランスヴェスタイトと呼ぶべきかも知れません。異称のRrose Sélavyとはフランス語の響きからもわかるように、「薔薇、それが人生」の地口ですが、rが2つ重なっているところがミソで、正確に発音しようとすれば「エロス、それが人生」とも聞こえてしまうのです。デュシャン／セラヴィー、なかなか手ごわい相手です。

手ごわいのは名前だけではありません。彼は20世紀におけるゲイジュツのあり方を根底からひっくり返してしまいました。ある展覧会に偽名のサインを入れた男性用便器を《泉》（1917）と題して出品してしまったのです。案の定展覧会関係者は慌てふためき、こんなものゲイジュツではないと出品を拒否しました。確信犯デュシャンは待ってましたとばかりに抗議の文を送ります。衛生陶器店のショーウィンドーで毎日見かけるものが、なぜ美術館のショーケースの中には入れてもらえないのか。ゲイジュツが自らの手でつくられたかどうかはさして問題ではない。要は見慣れたものに新しい「名前」を与え、別の「見方」を示すことだ、と。なるほど、そう言われてみるとその後のポップアートの流行や今日のパロディー、パクリの全盛が納得できます。

さていよいよ本題の『グリーン・ボックス』です。これは写真で見てもおわかりのように緑色のフェルトが貼られた紙製の箱に、94点の作家自身の作品写真をはじめ、ノートの切れ端に書かれたメモやスケッチの類が、その形状や紙質はもとより、インクの色、手書き文字のかすれやにじみに至るまでコロタイプ印刷によって忠実に再現されて収められたものです。この「箱になった本」には『その独身者たちによって裸にされる花嫁さえも』という、デュシャン／セラヴィーの代表作、いや20世紀美術史最大の「謎」といっても過言ではないガラスでできた未完のゲイジュツ作品（1915-23）[写真5]と同じタイトルが付けられています。

男性独身者たちの機械的で不毛な欲望の開花、花嫁の自発的な想像による欲望の開花、両者の弁証法的和解の不可能性。『グリーン・ボックス』の内容を無理に要約するとこうなりますが、これが通称《大ガラス》[写真5]と呼ばれる作品解読のためのテキストを提供していることは明らかです。観者／読者は緑の箱に収められた禅問答のような、ナンカイ読んでもナンカイなテキストの断片を順不同に「読む」ことで、イメージを「見る」だけでは理解のおよばない《大ガラス》の思考プロセスを各自追体験することが要請されています。このなんともマゾヒスティックな「快楽」こそ20世紀モダンアート鑑賞の極意なのです。

しかしデュシャン／セラヴィーはそんな私（たち）をせせら笑うかのようにこう言い残しています。「答えはない。なぜならそもそも問いがないからだ。」

ご愛読ありがとうございました。これで「美術家と本」は終わります。

（国際文化学部 国際文化学科 教授）

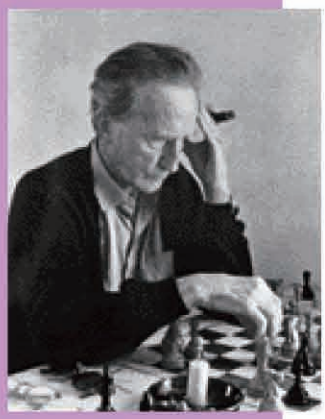


写真1：チェスに興じるマルセル・デュシャン。美術批評家アルトゥーロ・シュワルツによる1960年代の撮影。デュシャンは印象派から未来派までの近代美術史を一通りおさらいした後、1913年頃には「網膜的」（目を喜ばせるための）絵画の制作を放棄した。

写真2：ローズ・セラヴィーとしてのマルセル・デュシャン。写真家マン・レイによる1920-21年の撮影。この頃女性人格としてのローズ・セラヴィーが誕生。以後2つのジェンダーを巧妙に使い分けながら生活を続けた。

＜参考文献＞
3）マルセル・デュシャン著，ミシェル・サヌイエ編　北山研二訳，『マルセル・デュシャン全著作 』，未知谷，1995.［閉架4階 723/35/62］（参考文献2の邦訳。）
4）*Marcel Duchamp : Catalogue raisonné / rédigé par Jean Clair* ［pour la Rétrospective,31 janvier-2 mai 1977,Musée national d'art moderne,Centre national d'art et de culture Georges Pompidou, 1977. ［閉架　723/35/44］（パリのポンピドゥーセンターで1977年の開館展として企画されたデュシャン展カタログ。4分冊の内の第2冊目の作品目録。遺言で15年間公開を禁じていた《遺作》（1946-66）の内部写真が初めてカラー印刷されたことでも話題をまいた。）
5）Calvin Tomkins : *Duchamp : a biography*, H.Holt,1996.［閉架 723/35/35］
6）カルヴィン・トムキンズ著，木下哲夫訳，『マルセル・デュシャン』，みすず書房，2003.［開架4階 723/35/89］（現在日本語で読めるもっとも包括的なデュシャンの伝記。参考文献5の邦訳。）

写真3：通称『グリーン・ボックス』、正式タイトルは『その独身者たちによって裸にされる花嫁さえも』。1934年、ローズ・セラヴィー出版、33.2x28.0x2.5cm。300部限定のほか、デュシャンのオリジナル・ドローイングなどを含む特装版20部がある。

写真4：『グリーン・ボックス』には、デュシャンが《大ガラス》制作のために書き留めたメモやスケッチ（1911-15年）を正確に複製したもののほか、関連作品の写真など94点が箱の中にバラバラに収められている。

写真5：通称《大ガラス》、正式タイトルは『グリーン・ボックス』と同じ（その独身者たちによって裸にされる花嫁さえも）。1915-23年（未完成のまま放置）、油彩・ニス・鉛・埃・ガラス、277.5x175.8cm。作品の上半分が「花嫁」の領域で下半分が「独身者たち」の領域。現在、デュシャンの《遺作》（1946-66）などとともにフィラデルフィア美術館が所蔵。

＜参考文献＞
1）Arturo Schwarz: *The complete works of Marcel Duchamp*, 3rd rev. and expanded ed.,Delano Greenidge Editions,1997,2 vols.（シュワルツ編になるデュシャン全作品目録の決定版。とくに代表作222点の大理カラー図版に加え、詳細なデータを付した全663点のカタログ・レゾネはデュシャン研究の基礎資料。）
2）Marcel Duchamp: *Duchamp du signe : Ecrits, réunis et présentés par Michel Sanouillet*, Nouv.éd.revue et augm. avec la collaboration de Elmer Peterson,Flammarion,1994.［開架4階 085/0/11-614］（サヌイエ編になるデュシャンの著作集。『グリーン・ボックス』の全テキストを含む重要な著作やインタビュをほぼすべて網羅。）

ブックレビュー　新入生にイチ押しの1冊

『新約聖書を知っていますか』

阿刀田高著
新潮文庫　1996年
（開架2階 095/193/1）
宗教部長
人間科学部 児童教育学科 教授　磯 望

聖書をめくると、気の利いた、そして見覚えのある成句が随所に出てきますが、通読しようとするとこれほど読み通しにくい本もありません。阿刀田は、自分はキリスト教徒ではないと断ったうえで、聖書を真剣に読み、福音書から黙示録まで、著書の中で見事な語りをしています。著者は、ヨセフが身に覚えのない児を宿した婚約者マリアを、苦悩の中に受け入れ愛し守りぬいたこと、そしてその誕生の秘密に気づいたイエスが、旧約聖書の戒律（律法）を超越した神の愛を福音として説く原点には、ヨセフのマリアへの愛情があったことを示唆しました。この本は新約聖書を俯瞰する入門書としてお薦めしますが、私は聖書を実際に自分で通読することもお薦めします。

『カルチャーショック ハーバードVS東大 アメリカ留学生のみた大学教育』

ベンジャミン・トバクマン著
大学教育出版　2008年
（開架3階 377/0/174）
教務部長
人間科学部 児童教育学科 教授　松永 裕二

本書は、そのタイトル通り、わが国の東京大学（大学院教育学研究科）に2006年10月から2008年3月まで留学したアメリカ人・ベンジャミン・トバクマンが、母校であるアメリカのハーバード大学と東京大学を「体験的」に比較したものです。東京大学で大きなカルチャーショックを受けた著者は、大学入試のあり方、学生生活、大学の授業などにおける両大学の相違を鮮烈に描いています。「ハーバードにしか受からないホームレス」、「深夜のヌード・マラソン」、「ダーティー・ランドリー・プロジェクト」など、ハーバード大学に関する興味津々の話題に皆さんは引付けられることでしょう。と同時に、著者の辛辣な東京大学批判ー「人間性を押し潰す入学制度」、「無に帰す外国語学習」、「成熟し切れない学生」などーには大いに考えさせられることでしょう。これらの批判は、わが国の大学全体に向けられたものとも言えるからです。これから4年間の大学生活をより有意義なものにするために、本書の一読を是非お薦めします。

『ウェブ進化論 本当の大変化はこれから始まる』

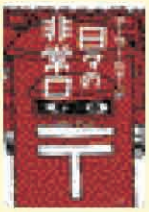
梅田望夫著
筑摩書房　2006年
（開架2階 007/3/268）
情報処理センター所長
商学部 経営学科 教授　史 一華

なぜ、Googleはすごいのですか？なぜ、Amazonは成功しているのですか？このような多くの疑問に答えながら、IT革命から始まる情報化社会の本質とその行方を考えさせてくれる一冊です。著者は、チープ革命によって作り出している「情報の遍在化」が革命の本質であるという考え方をベースに、「グーグルによる知の世界を再編」、「Amazonを成功させたロングテールとWeb2.0」、「インターネットを重要なメディアと成長させるブログ・SNS」、「グーグル、ヤフー、マイクロソフトの違い」などのテーマで、時代を代表する企業とトレンディを分かりやすく読み解きます。激しく変化する時代の流れと、全編に渡るグーグルの企業像とその野望は、きっと皆さんにとっていい刺激になります。

『小説 上杉鷹山』

童門冬二著
学陽書房　1995年
（開架4階 913/6D85/10-1～2）
学生部長
商学部 商学科 教授　小川 雄平

上杉鷹山（1751～1822年）は、米沢藩主として、財政危機に瀕していた藩の財政再建を果たすに止まらず、地場産業を興し、藩校興譲館を創設して人材育成にも努めたことから、名君として高く評価されることになった人物である。知っておいて欲しいのは、鷹山が日向高鍋藩秋月家から名門上杉家に養子に入り、弱冠17歳で藩主の座に就いたことである。かつて、宮崎から気候風土も生活環境も全く異なる山形の地に赴き、孤立無援の中で困難な藩政改革に取り組んだ17歳の若者がいたことを知って、「指示待ち」「引き籠もり」と揶揄される新入生諸君に発奮して貰いたい。著者の臨場感溢れる描写に、手に汗握って先を急いで気が付けば、上下巻共に読了していよう。



『日々の非常口』

アーサー・ビナード著
朝日新聞社　2006年
（開架4階 914/6B44/1）
言語教育センター長
文学部 外国語学科 英語専攻 教授　久屋 孝夫

年越しにドイツの友人宅に招かれた。手ぶらで行ったので、お別れに英訳を添えた短歌を贈り、日本語と英語で詠み上げた。英語の教師である友人はそれをいたく喜び、短歌に出てくる手書きの漢字に興味をもち、書き順や読み方や意味を問うてくる。相手からの予期せぬ質問に、母語の使い手には自明のさまざまなことがそうでないものとして意識にのぼってくる。奇妙な体験である。この本にも「田んぼに雨が降ったら雷も落ちる」「雷にコードをつなげれば電気がつく」など漢字の覚え方のエピソードが出てくる。エッセー集だが、発想が詩的でおもしろい。著者はアメリカ人。非母語である日本語で書くゆえに詩的要素がさらにシュールに混じる。そのスタイルに、複眼思考の柔らかさと温かさに心打たれる。ジェット機発明以前のjet lagは何と呼ばれただろうか？「時差ぼけ」なる日本語に一日の長ありか？

『カルチュラル・アイデンティティの諸問題 誰がアイデンティティを必要とするのか？』

スチュアート・ホール、ポール・ドゥ・ゲイ編（柿沼 敏江他訳）
大村書店　2001年
（開架3階 361/5/305）
国際センター所長
文学部 外国語学科 英語専攻 教授　ドゥエン オルソン

留学の目的は「語学力を身につける事」と思う人が多いですが、私はそれよりも留学することによって、初めて自分の「文化」を知ることが出来ると強調します。留学を切っ掛けとして、初めて外から自分の文化が見えてくるからです。当然と思っていたことが当然ではなくなります。自分の「文化」を理解することによって、「自分」をより理解することに繋がります。上記の本は十人の英米学者が文化とアイデンティティを見つめて分析しています。この分析の前提の一つは各自のアイデンティティは流動的な過程であり、定められないものです。だからこそ、近年の米国でのカルチャー・ウォーズ（文化戦争＝アイデンティティ定義紛争）が話題になっています。「自分」のアイデンティティとそれを共有している仲間と、そうでない人々をどういうふうに判断するか、いろいろな文化概念の観点から論じています。現代、世界中のいろいろな紛争の背景にアイデンティティという問題が絡んでないことは少ないです。日本の歴史教科書問題を理解するのにもこの本はヒントになると思います。

世界の図書館
［タイ編］

［シーソーダー寺院付属学校と図書室前にて、
カレン族の僧侶（左から2人目）、青年僧らとともに］

［タマサート大学中央図書館］

［チュラロンコン大学中央図書館］

シーソーダー寺院付属学校図書室

17Moo 2, T. Suthep, Muang Chiang Mai, Thailand, 50200
http://www.watsrisoda.com/

国際文化学部 国際文化学科 教授　片山 隆裕

国民の約94％が仏教徒のタイには、31,000余の仏教寺院がある。「北の薔薇」の愛称をもつタイ北部の中心都市チェンマイは、1296年に、マンラーイ王によって建都されて以来、700年余の歴史を誇り、城壁に囲まれた旧市街を中心に数多くの仏教寺院が造られ、古都としての風情を醸し出している。チェンマイ市内をほぼ東西にはしるフアイケーオ通りに車を走らせ、西方のドイ・ステープ方面に向かう。国立チェンマイ大学を左手に見ながら、1キロほど行ったところにあるシーソーダー寺院は、その規模の大きさと目新しい建物がひときわ眼をひく仏教寺院のひとつである。この寺院には、12歳から20歳になる約400人の山岳少数民族の子どもたちが少年僧としての修業をしながら、寺院併設の学校に通っており、教師を務める僧侶たちもその多くが山岳少数民族である。寺院併設の図書室には、仏教関係の書物はもちろん、様々なジャンルの書物のほか、雑誌、新聞などが数多くそろっており、山岳少数民族の少年僧たちの学習の場として機能している。

［図書室内の様子］

タイ政府は、冷戦下の1950年代以降、国境警備の強化、アヘン栽培の撲滅などの理由から北部山岳地帯に住む山岳少数民族に関心を示し、彼らの国家への同化政策を推進してきた。内務省公共福祉局の主導によって1965年から始められた「タンマ・チャーリック計画」は、山岳少数民族に対する仏教布教計画と呼ばれるもので、山岳少数民族が多く住む北部タイの各県を対象として進められてきた異民族同化政策である。政府は、山岳少数民族の同化政策に仏教を利用し、非仏教徒である彼らをまず「仏教徒化」することによって「タイ人化」しようと考えた。内務省の要請に基づいて、山岳民族教化のために、チェンマイ、チェンラーイ、メーホンソン、タークなどの北部諸県に1965年から1968年の4年間に350人の僧侶が赴き、仏教の布教活動を行ったという。

その後、タイ北部にある幾つかの仏教寺院は、「タンマ・チャーリック計画」を実施するための寺院として、山岳少数民族の子弟を受け入れて教育を行う機関としての役割を果たすようになるが、1971年からその役割を担うことになるシーソーダー寺院も、そうした寺院のひとつである。以来、この寺院で修業をし、併設の学校で勉強し、図書室で学習をした少年僧たちは、卒業後、それぞれの山地の村へ帰り、仏教の普及に寄与したり、村の指導者になったりするが、中にはチェンマイやバンコクなどの大学へ進学したり、留学を希望したりする者もいるそうである。「日本語を勉強して、日本に留学したいです！」—何度目かの訪問時に親しくなったカレン族出身の少年僧の一人は、力をこめて筆者にこう語った。

（［写真上］著者撮影／［文中写真］著者撮影）

タマサート大学中央図書館

Thammasat University Library:2 Prachan Road,Pranakorn Distric,Bangkok,Thailand,10200
http://library.tu.ac.th/cms/index.php

経済学部 国際経済学科 教授　東 茂樹

タイの首都バンコクを流れるチャオプラヤ川の東岸プラジャン桟橋と王宮前広場の間に、タマサート大学本部キャンパスが位置する。交通渋滞のなか、やっとの思いでここに着くと、チャオプラヤ川の雄大な流れを前にして、落ち着いた気分を取り戻し、再び勉学に励むことができる。以前チュラロンコン大学大学院に2年あまり留学していたが、後半の1年間はタイ経済に関する書籍や資料が豊富なタマサート大学経済学部図書室に、都バスに乗って通い詰めていた。

タマサート大学は、1934年にプリディー・パノムヨンが創設したタイで2番目に古い伝統をもつ大学である。プリディーは1932年に絶対王政を打倒した立憲革命の中心人物で、内相の時に国民に奉仕する法律や行政の専門家を養成する目的で設立し、初代学長となった。自由を重んじ進取の気性に富んだ学風を育んできたことで有名で、1973年に軍事独裁政権を追放した学生運動の舞台ともなった。また経済学部には、首相府予算局の初代局長でタイ中央銀行総裁も務めたプワイ・ウンパーゴンが1964年に学部長に就任し、著名なタイの経済官僚や経済学者が薫陶を受けている。

[雑誌閲覧室]

中央図書館はもとはキャンパスの北側にあったが、創立60周年記念事業として、大学のシンボルである時計台の斜め向かいに新しく建立され、プリディー・パノムヨン図書館と名付けられた。閲覧室および書庫は、タイでは初めて地下1～3階に設けられた。地下の広大な空間を活用して、マルチメディアなどの設備も整えられたが、湿気の多い点が図書の保管に難点となっている。館内にはプリディーの手紙や記念品を展示した部屋があり、タイ近代化の足跡をたどることができる。

タマサート大学は文化系総合大学であったが、1980年代後半にバンコクの北の郊外ランシットに理科系学部が新設された。1998年にタイで開催されたアジア競技大会は、ここが競技会場となった。大会終了後は文化系学部のランシット・キャンパスへの移転が段階的に行われ、本部キャンパスは昨年から大学院生のみが学んでいる。学部学生の図書利用に応えるために、ハンドボール競技体育館が改築され、2002年にプワイ・ウンパーゴン図書館と名付けられて開館した。館内にはやはりプワイ記念展示室があり、タイの経済開発に尽力した人となりを偲ぶことができる。なお両図書館の間では、図書の24時間以内配送サービスがある。

昨年末に原稿執筆を依頼されて、久しぶりに司書に中央図書館を案内していただいたが、図書検索など利便性の良さは留学時代とは雲泥の差である。ワット・プラケオ（エメラルド寺院）から歩いて数分の距離にあるので、是非立ち寄ってみていただきたい。

（[前ページ写真]平井先生撮影／[文中写真]平井先生撮影）

チュラロンコン大学中央図書館

Chulalongkorn University Library:254 Phyathai Road,Patumwan,Bangkok,Thailand,10330
http://library.car.chula.ac.th

法学部 法律学科 准教授　平井 佐和子

チュラロンコン大学はバンコクの中心部に位置するタイ国立（王立）大学である。1917年にタイ初の大学として開学し、タイ最高学府としての地位と栄誉を占めている。チュラロンコン大学は、現在、文学部、政治科学部、法学部、教育学部、工学部、医学部など18の学部と11の研究所を擁する総合大学であり、スタッフ数4600人、学生数は36300人（うち40%近くが大学院生）を数える。

学部生は制服着用が義務付けられている。制服といっても、男子は白の長袖シャツに大学ネクタイと黒のズボン、女子は白のブラウスに黒のスカートという決まりだけなので、特に女子にとってスカートの形にはこだわりが見られる。タイでも進学率が高まっているが、チュラロンコン大学まで進学するのはエリート中のエリートであり、シャツにチュラロンコン大学の校章が光る学生たちはどこか誇らしげである。

[入館時の身だしなみ注意]

[図書館使用の注意事項]

チュラロンコンとは、現代につながるチャクリー王朝ラーマ5世の名であり（現在はラーマ9世）、タイの近代化を果たした王として知られる。“Shall we dance?”の音楽で有名なミュージカル映画「王様と私」（1956年）は、チュラロンコン王子の家庭教師として赴任したイギリス人女性から見たタイが描かれている（タイでは、王様に対して不謹慎であるとして上映禁止）。

さて、チュラロンコン大学中央図書館は、1910年に設立された「公務員養成学校」にその前身があり、1978年に、大学中央図書館と、タイ情報センター、視聴覚センターが統合されて、Center of Academic Resources(CAR)が設立された。1992年からインターネットを導入し、各学部の図書館、またタイ国内の32大学とネットワークを結び、Chulalinet（Chulalongkorn University Library Information Network）という情報ネットワーク化を進めている。大学図書館は、学生の学位論文や研究者の調査・研究の成果といった知の集積にとどまらず、オンラインで電子出版物やメディアを検索・閲覧できるといったサービス提供により、今後ますます、デジタル図書館としての役目を果たしていくことになるだろう。

開館時間は平日8:00～21:00。南国らしく、朝早いのが特徴である。学外の利用者は20バーツ（約50円）を支払って入館する。年間の利用者は100万人、OPAC利用者は1400万人にのぼる。便利なのは、コピーサービスである。各階にコピーサービス室があり、文献の箇所を指定すると1枚0.5バーツ（約1.3円）で係員がコピーしてくれる。タイでは、学生はエライのである。

（[前ページ写真]著者撮影／[文中写真]著者撮影）

使ってみようシリーズ 10　図書情報課　相田 芙美子

新聞記事を探す

世の中のニュースを知らせるメディアとしてテレビ、ラジオ、インターネット等がありますが、『新聞』も重要な情報源です。特に、新聞の内容には時代の反映を見ることができるため、過去から現在まで世の中の出来事を調べるためには欠かせないものといえるでしょう。

今回は図書館で新聞を利用する方法とあわせて役立つ豆知識を紹介します。

1. 新聞の利用方法

では、まず毎日届く新聞（紙）の利用方法を紹介します。

① 新聞コーナー　図書館の入口を入って左側に新聞コーナーがあります。

最新日の新聞は「閲覧台」【写真1】に、前日の新聞はコーナーの中にある「新聞ハンガー」【写真2】にかけて置いています。それより前の日の新聞は、書庫の新聞置き場【写真3】で保管しています。期間は1年間です。カウンターで利用を受け付けています。申込書に記入してもらい、職員が取り出してくる方法になっています。

【写真1】閲覧台

【写真2】新聞ハンガー

【写真3】新聞置き場

［新聞コーナーで読める主な新聞］
- 朝日新聞
- 毎日新聞
- 読売新聞
- 西日本新聞
- 日本経済新聞
- 日経MJ
- 日刊工業新聞
- Fuji Sankei Business i
- 西日本スポーツ
- 産経新聞
- 日刊工業新聞
- Japan Times
- International Herald Tribune

※他にも、中国、韓国、フランス、イギリスの新聞も館内にあります。

② 過去の新聞の利用方法

①で、新聞（紙）は「1年保存」と説明しました。では、それより前の新聞記事はどうやって利用すればいいのでしょうか。新聞は紙（原紙といいます）での保存性がよくないため、保存と利便性のため、次のような別の形で提供しています。

(A) 縮刷版：新聞の元の大きさを約4分の1にして本の形にしたもの。1月分で1冊。索引や総目次がついている。（写真4、5）

(B) マイクロフィルム：新聞を縮小撮影したフィルム。1巻約30.5メートル。約700コマ撮影できる。1コマに普通の新聞なら1ページ入る。専用の機械（マイクロリーダー）を使って利用する。（写真6、7、8）

(C) データベース：新聞の記事や紙面をデータ化、画像化して検索できるようにしたもの。学内ネットワークにつながっているパソコンならどこでも利用できる。（2. 新聞データベースの利用方法へ）

【写真4】縮刷版（概観）

【写真5】縮刷版（開いたところ）

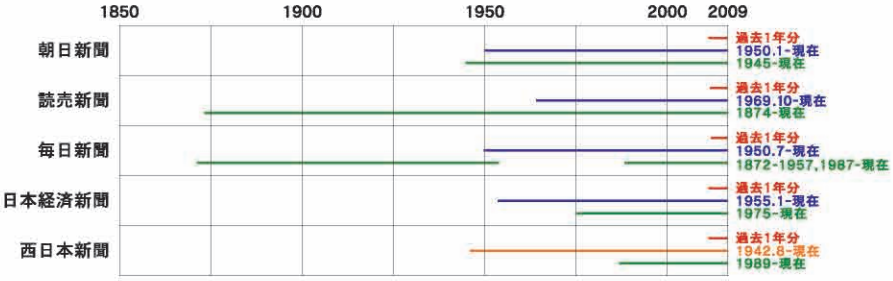
【写真6】マイクロフィルム

【写真7】紙面のコマ

【写真8】マイクロリーダー

データベースで利用できるのは
- 「朝日新聞（きくぞう聞蔵IIビジュアル）」
- 「読売新聞（ヨミダス歴史館）」
- 「毎日新聞（毎日Newsパック）」
- 「日本経済新聞（日経テレコン21）」
- 「西日本新聞（パピルスPAPYRUS）」

の5紙です。



〔新聞提供期間一覧〕

原紙
縮刷版
マイクロフィルム
データベース

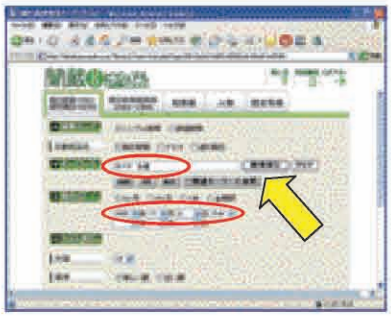
2. 新聞データベースの利用方法

次に、新聞データベースを使って記事を探す方法を紹介します。

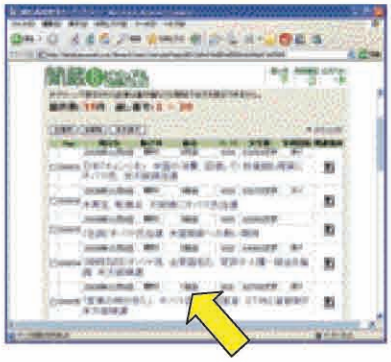
例：アメリカの第44代大統領、バラク・オバマ氏の当選確定の記事を探してみましょう。日付は2008年11月5日（日本では6日）であることがわかっています。

① データベースにアクセスする
図書館ホームページ＞パスファインダー：新聞・雑誌記事のページから見たい新聞のデータベースを選ぶ。（今回は「聞蔵IIビジュアル（朝日新聞）」を例に説明します）

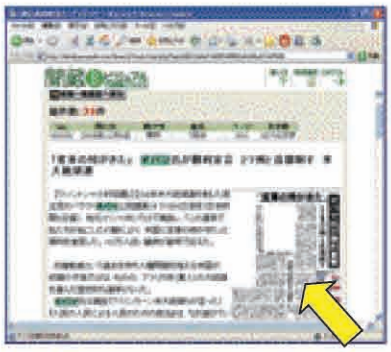
② 検索画面で「キーワード」と「発行日」を入力して［検索実行］をクリックします。



③ 検索結果が一覧表示されるので、見たい記事（今回はNo.5）をクリックします。



④ 記事の内容が表示されます。入力したキーワードには色がつけられています。また、画面右に写っているのは新聞紙面に掲載されたその記事の画像です。試しにクリックしてみましょう。



⑤ 記事の画像がPDFファイルで表示されます。（ただし、写真の画像は著作権等の権利処理の関係で表示されないこともあります。）この画像は印刷やファイルとして保存することもできます。

『新聞豆知識』

新聞とは

社会の出来事の報道・解説・評論をすばやく、かつ広く伝えるための定期刊行物。多くは日刊で、週刊・旬刊のものもある。表紙がなく、折ったり綴じたり製本していないのが特徴。

新聞の種類

次のふたつに分かれます。

一般総合紙（全国紙、ブロック紙、地方紙）

皆さんが家で購読している「朝日」「毎日」「読売」は『全国紙』、「西日本新聞」は『ブロック紙』、「熊本日日新聞」「南日本新聞」は『地方紙』と呼ばれています。

専門紙（業界、各種団体、政党、政治団体、宗教団体）

専門分野の特定の人向けに発行されている新聞を『専門紙』と呼びます。

【西南学院大学図書館で購読している専門紙の一例】

- 「週刊福祉新聞」
- 「労働新聞」
- 「日本教育新聞」
- 「科学新聞」

新聞の読み方

新聞のもっと上手な読み方を知りたいという人にお薦めの本があります。

●池上彰著
「池上彰の新聞勉強術」
ダイヤモンド社、2006年（開架2階 070/4/44）

●町田徹著
「初心者のための『日経新聞』の読み方」
東洋経済新報社、2007年（開架3階 330/0/32）

●渋井真帆著
「渋井真帆の日経新聞読みこなし隊」
日本経済新聞社、2005年（開架3階 330/4/99）

●日経読み方ガイド
（日経新聞ホームページ）http://www.e-newssite.jp/

新聞とインターネット

インターネットで最近の新聞記事を読める新聞もありますが、時間がたつと読むことができません。紙とインターネット、データベースも含めどのようにニュースを伝えていくか、各新聞社では今後のビジネスモデルを模索しています。気になる人は次の本も読んでみてください。

●河内孝著
「新聞社：破綻したビジネスモデル」
新潮社、2007年（開架2階 070/18/9）

●青木日照、湯川鶴章著
「ネットは新聞を救うのか：変貌するマスメディア」
NTT出版、2003年（開架3階 361/45/259B）

●中馬清福著
「新聞は生き残れるか」
岩波書店、2003年（開架2階 092/070/7）

蔵書ギャラリー no.7

文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授　武末 祐子

Claude Monet : biographie et catalogue raisonné

『ダニエル・ウィルデンシュタイン「モネ」全5巻』

Daniel Wildenstein, Bibliothèque des arts, 5 vols, 1974-1991
[大型本 開架2階 723/35/87-1～5]

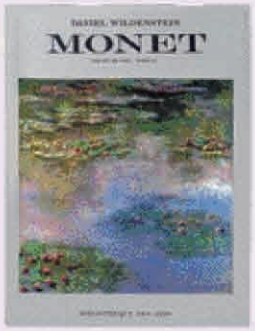


写真1：第4巻の表紙

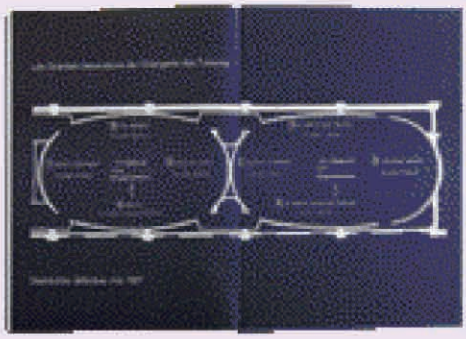


写真2：『睡蓮』パネルのオランジュリー配置図（第4巻）

写真3：モネの書簡（第4巻）

ダニエル・ウィルデンシュタイン編纂の『モネ』全5巻（1974-1991）はクロード・モネ（1840-1926）研究には欠かせない貴重書である。年代順に第1巻は1840-1881年、第2巻は1882-1886年、第3巻は1887-1898年、第4巻（写真1）は1899-1926年の絵画作品を、第5巻はデッサン、パステル画、文献リストの他、前4巻出版のあとに発見された絵画や文献を収録している。1～4巻では年代に対応してウィルデンシュタインによる伝記が読める。モネが後半生に住んだジヴェルニーと周囲の町や村の写真、晩年の大作『睡蓮』パネルのオランジュリー配置図（写真2）も圧巻だ。17年をかけて完成されたこの資料の貴重さは、2044枚収集された膨大な絵画量と、各絵の来歴、文献など書誌情報が網羅されている点、そしてなんといってもこの資料全体を支え、モネ研究者にとっては必要不可欠なモネの書簡（3106通）（写真3）が掲載されている点にある。

モネの書簡は、借金の依頼や展覧会の打ち合わせ、庭の花の植え方、絵画製作の苦悩を打ち明けたものまでさまざまあるが、画家の真摯な、職人気質で妥協を嫌う性格、日常生活や絵画制作を雄弁に物語る。

「距離」を表す遠近法を用い「線」を重んじた伝統的でアカデミックな歴史画を拒否し、自然観察と戸外制作による色彩を重視した「斑点」技法による風景画を描いた印象派の巨匠というのはモネを語る常套句であるが、目に見えるものを描くという姿勢は終生捨てなかった。

書簡を通読して私が注目したのは、晩年のモネの「目」への執着である。ウィルデンシュタインによる通しナンバー2332（1920.1）の書簡では視力の低下を嘆き、2504（1922.8）では霧の中で描いているようだと語っている。それまで失明を恐れて拒み続けてきたモネが、名医クートラによる白内障の手術を承諾し、1923年1月に1回目、同7月に2回目の手術を受ける。手術は成功した。モネは読み書きはできるが、色がけばけばしく見え判別できないと訴える。ナンバー2531（1923.9.9）クレマンソー宛の手紙：「クートラが往診にきて口にすることは線lignesと距離distancesの歪みについてだけだ。それはきっとそのうち回復されるだろう。でも僕は色の歪みに苦しんでいる。それは彼にとってたいした心配じゃないようだ。」（vol.4, p.416）線の歪みと距離感の回復が第一だと思っている名医と色彩の判別が重要と考えるモネのずれは、19世紀の「線」と「色」の絵画論争を彷彿とさせる。モネが直感的に拒み続けた手術は、彼が捨てた「線」と「距離」の絵画の皮肉な報復にも思える。残った左目の手術を拒否したのは当然であろう。

編集後記

新入生のみなさん。入学おめでとうございます。今号は、各部局長の立場から先生方が新入生のみなさんへ推薦する本を紹介しています。学生生活の糧となる本ばかりですので、ぜひ手にとって読んでみてください。もちろん全て図書館で所蔵しています。図書館には、学術書以外の本や雑誌もたくさんあります。少し時間を割いて、楽しむ読書のために来館しませんか。後藤館長による連載「美術家と本」は今号が最終回です。次号の企画もお楽しみに！

（D. Y）

※本紙で紹介した作品の画像については、著作権者の許諾を得ています。

西南学院大学図書館報 No.166

2009（平成21）年4月23日発行
編集　図書館報編集委員会
発行　西南学院大学図書館
〒814-8511
福岡市早良区西新6丁目2番92号
TEL（092）823-3426
http://www.seinan-gu.ac.jp/library/

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY